

清水小学校 森林環境教育（森林ＥＳＤ）プログラム分析シート

プログラム名： 郷土の森の森林体験からふるさとの自然を考えよう		
(1) プログラムの目標	自分達の周りの地域（ふるさと）の人々とともにさまざまな体験をすることで、地域の自然や産業に関心をもつとともに、地域の環境保全や生活向上のために自分達が現在及び将来にわたって出来ることを考え、実践することを目標にしている。 4年 橋本ひだまり倶楽部と連携して、橋本市運動公園の近くの「郷土の森」での森林探検、木工体験、竹林伐採体験を実施し、森林の中で活動することを楽しむとともに、地域の自然環境の保全に関わっている方々と出会い、環境を保全することの大切さを学ぶ。	
(2) プログラムの概要	本校では、地域の自然環境に応じた人々の暮らしや後世に伝えるために維持管理している人々の思いに触れ、自己の生き方について考える子供を育てていきたいと考え、全学年を通じてふるさと学習を実施している。 4年生は、ふるさと学習の一環として、県緑育推進事業やみどりの募金事業を活用して、郷土の森で森林体験や木工体験、竹林伐採等を行ってきたことについてまとめる。	
(3) プログラムの展開		
活動内容について、プログラムの流れで、記載する。 合わせて、段階的な学びとして、3つのタイプのアクティブ・ラーニング（in、about、for）の視点で活動内容を区分してみる。 ・ in（～の中で）－ 体験、観察、製作など（関心・意欲、知識・技能） ・ about（～について）－ 情報収集・分析、情報交換、討論など（知識・技能、思考・判断・表現） ・ for（～のために）－ 提案、実践など（態度、参加・行動）		
時間数	プログラムタイトル	
	活動内容	指導・支援の方法、ポイント等（教材等）
	in、about、for の視点で活動内容を区分	
7	木工体験（10月）	
	①小刀で鉛筆を削る。 ②和歌山県のアサギ板を使って、プランターボックスを作る。 ③間伐材を使って炊いたかまどご飯をいただく。	①小刀の使い方について指導する。他人を傷つける可能性があることを徹底して指導する。 ②ノコギリ、カナヅチを使うので、安全面で十分配慮する。正しい使用方法について、見本を示しながら丁寧に説明する。工程ごとに説明して、進捗を確認する。 ③かまどで炊いたご飯や豚汁をみんなで分けて食べる。
	in 木工体験で、和歌山県の木材の活用についての関心を高める。	
4	森林探検（10月、12月）	
	①森林探検では、五感を使って森の中の鳥の声や匂い、感触などを楽しむ。 ②森林にはイノシシやリスなどの動物が生活していることや人間の生活との関わりを知る。 ③秋と冬の野山を比較し、違いに気付かせる。	①森の中の危険について知らせる。 森を歩く心地よさを十分に味わえるよう声をかける。 ②森の中には食べられる木の実や草の実がたくさんあることやイノシシのぬた場があり、動植物の生活があることを知らせる。一方で、近くのゴルフ場からたくさんゴルフボールが飛んでくるなど、人間の暮らしとも近いことを知らせる。 ③草の実や枯れ葉の様子等、10月の山との違いから季節の移り変わりに気付かせる。
	in 森林探検で自然林に触れ、森林に関する関心を高める。	
3	竹林伐採（12月）	
	竹林伐採を行う。 間伐の重要性について学ぶ。	間伐の必要性について指導する。 ノコギリの扱い方について十分指導する。 切り株や切った竹を倒す方向に注意する。 切った竹は枝を払い、持ち帰りやすい長さに切ることを指導する。 周囲の児童に当たらないよう気をつけて竹を持つよう指導する。
	about 森林の役割や間伐の必要性についての知識・技能を学ぶ。	
2	校庭の美化（12月）	
	郷土の森で作成したプランターボックスを利用して、校庭を花で飾る。	卒業生を送るための作業であることを伝える。 地域の方が種から育てたパンジーであることを伝える。
	for 自分達が作ったプランターボックスが卒業生を送るために役立っていることを知る。	

（４）プログラムでの連携内容

（教育機関、地域、団体等での、①連携・協働先、②役割分担、③具体的な連携・協働の内容）

①連携・協働先：橋本ひだまり倶楽部

②役割分担：児童に体験させたいこと、考えさせたいことについて学校とひだまり倶楽部で協議し、ひだまり倶楽部がプログラムを作成している。

当日までの材料の準備・郷土の森の点検・昼食の準備等は、ひだまりクラブが行う。

当日は、スケジュールに従い、ひだまり倶楽部の指導者が体験の指導をする。引率教員が児童管理を行う。振り返りを行い、次年度の改善につなげる。

③木工体験・森林探検と竹林伐採を２日に分けて行っている。

学校行事等と調整して日程・内容を決定している。

児童の状況にあわせて、毎年少しずつプログラムを変えている。

過去３年間は本立てを作成したが、平成２９年度は、より製作が難しいプランターボックス作りに挑戦した。

学習指導要領との関連

1年	生活：身近な自然の観察、利用
2年	生活：生き物を育てる、成長
3年	社会：飲料水、地域の生活 理科：昆虫と植物（自然の観察、植物を育てる）
4年	社会：都道府県の様子・生活 理科：季節と生物（身近な植物の成長、季節による違い）
5年	社会：国土の自然・環境、国土保全 理科：植物の発芽、成長、結実
6年	社会：歴史上の事象、文化財 理科：生物と環境
総合的な学習	横断的・総合的な課題の学習、社会体験、討論・発表
特別学習	遠足・鑑賞、集団活動・生活

森林環境教育の視点

1 感性的経験	感性的な内容 — 森林の感覚的把握や美的把握、畏敬の念など
2 自然的特性	森林の自然的特性に関わる内容 — 植物や動物の生態など
3 多面的機能	森林と人とのかかわりに関する内容 — 森林の働き、保安林など
4 現状・課題	森林の現状に関する内容 — 森林の荒廃、人手不足など
5 管理・維持	森林の管理・維持に関する内容 — 森林整備、育成、維持、管理など
6 歴史・文化	森林とのかかわり方の歴史 — その土地での歴史、薪炭林、炭焼き

（５）活動の分析（学習指導要領との関連または森林環境教育の視点） 上位３項目

教科・項目、視点	学習内容
「感性的経験」 森を体験する 森を楽しむ	森に入り、木や土の香り、鳥の声、日なたと日陰の気温の違い等を楽しむ。 展望台から自分達の地域を見下ろす俯瞰の感覚を楽しむ。 倒木を乗り越え、枝をくぐり、道なき道を探検する感覚を楽しむ。 怪我やスズメバチの危険について知る。
「自然的特性」 植物や動物の生態を知る 自然の変化に気付く	広葉樹中心の郷土の森を、秋と冬の２回に分けて森林探検を行うことで、季節の移り変わりや自然の変化に気付く。 指導者から、植物や動物の生態について説明を受け、日陰や日なたなどそれぞれの特性に応じた生き物の生態に気付く。 栗、しいたけ、冬イチゴなど自然の恵みをいただくことで、人間と自然の関わりについて考える。
「管理・維持」 森林の役割を学ぶ 間伐の必要性	竹林伐採を実施し、間伐の必要性について学ぶ。 間伐材を利用したプランターボックス製作から、森林資源の活用について学ぶ。 イノシシのぬた場やゴルフ場から飛んできたゴルフボールから、環境を保全することの大切さを学ぶ。

(6) 活動の分析 (資質・能力の視点)				
E S Dの要素 (生きる力)	能力	1 批判的に考える力	態度	5 他者と協力する態度
		2 未来像を予測して計画をたてる力		6 つながり尊重する態度
		3 多面的、総合的に考える力		7 進んで参加する態度
		4 コミュニケーションを行う力		
資質・能力 (三つの柱)	①生きて働く「知識・技能」の習得			
	②未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成			
	③学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性」の涵養			
次期学習指導要領では、持続可能な開発のための教育（E S D）等の考え方も踏まえつつ、「生きる力」とは何かを、「資質・能力」（三つの柱）に沿って具体化するとしています。 活動を、三つの柱の項目に再整理して記載をしてください。（該当がない項目は空欄）				
項目	E S Dの要素（7つの能力・態度）の視点で見つめ直して、 もっとも重視する視点の内容を記載してください。			
①生きて働く「知識・技能」の習得	5 他者と協力する態度 プランターボックス作成で、板から部材をノコギリで切り出す際に、寸法を測る・板を押さえるなど協力して作成することで完成させることが出来る。 竹の伐採の際に、竹のどの部分にノコギリを入れるのが良いか話し合い、切り方・倒す方向についても互いにアドバイスすることができる。 間伐して短く切った竹を、長さや重さから誰が持つかを考え、協力し合って持ち帰る。			
②未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成	4 コミュニケーションを行う力 指導していただく大人への挨拶、礼など日頃固定された生活の中でおおざりにしがちな礼儀について、意識する。 初めての体験をするときには、指導者の説明を集中して聞く態度を身に付ける。 説明を自分なりに理解し、危険のないように作業を組み立てることが出来る。 わからないことは積極的に質問したり、意見や感想を自分の言葉で発表できる力を養う。			
③学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性」の涵養	3 多面的・総合的に考える力 森には楽しいこともあるが、転落やスズメバチなどの危険もあるなど、危険を予測した行動を取る必要性を学ぶ。 間伐の必要性や森林資源の活用について学び、森林環境保全のために自分達が地域で出来ることは何かを考えさせる。			
(7) 実施後、参加者の変化				
活動は4年目になり、定着している。4年生になると、郷土の森に行けることを楽しみにしている。「森林探検が楽しかった」、「冬イチゴがおいしかった」、「来年も来たい」という声が毎年聞かれる。 毎年、全校児童が行っている秋の遠足「国城登山」で、途中に見られる山に対する見方が変わった。（イノシシのめた場、食べられる木の実、間伐、ポイ捨てのゴミ等） 自分達が作ったプランターボックスを卒業生のために使えることを楽しみにしている。				
(8) 安全対策として事前・当日の取組事項				
事前にひだまり倶楽部の担当者と打合せを行い、万が一の事故の場合の対応について確認している。 森林探検では、救急用具、携帯電話を必ず携行し、すぐに連絡を取り合うことが出来るようにしている。 木工体験では、各テーブルに指導員を配置するとともに、活動前や活動中にその都度注意喚起している。 発達課題のある児童については、事前に情報共有し、安全面の配慮をする。				
(9) プログラムの今後のめざす方向・展開				
竹林や森林間伐の必要性、森林資源の活用・自然環境保護等の活動内容の充実と事後学習を深める。 プランターボックス作成を通じて、間伐材の活用への関心を高める。 校区の方々と連携し、校区の自然環境保全の活動を行う。				
(10) 現状での課題、質問事項など				